

第11回 CPD 協議会 ECE プログラム委員会幹事会
議事録

1. 日時：平成24年7月24日（火）10:00-12:00

2. 場所：日本工学会会議室

3. 出席者

川島一彦、小松生明、高草木明、秦信宏、長井寿、但田潔、盛山保雄、四戸靖郎、奥津良之（（公）計測自動制御学会、オブザーバー）

4. 配付資料

資料 11.1 第10回 ECE プログラム委員会幹事会議事録（案）

資料 11.2 平成23年度 CPD 協議会 ECE プログラム委員会事業報告

資料 11.3 平成24年度 CPD 協議会 ECE プログラム委員会事業計画

資料 11.4 ECE プログラムの必要性と要件に関する報告書（第1章及び第2章の抜粋）、日本工学会 CPD 協議会 ECE ワーキンググループ、平成21年3月

資料 11.5 CPD 協議会 ECE 委員会名簿

資料 11.6 SICE 続プロセス塾2012（（公）計測自動制御学会）

資料 11.7.1 ECE プログラムの要件（秦）

資料 11.7.2 ECE プログラムに対してどのような内容が求められるか（小松）

資料 11.7.3 今後の ECE プログラムについて（但田）

資料 11.7.4 世界を変える人材をつくるプログラム（高草木）

資料 11.7.5 新しい価値はどうやって生み出すのか？-オーガナイザーとしての実感と期待-（長井）

資料 11.7.6 ECE プログラムが果たすべき役割（川島）

資料 11.7.7 ECE プログラムのニーズ（盛山）

5. 議事

1) 前回議事録（案）確認

字句1箇所を修正の上、議事録として承認された。

2) 平成24年度 CPD 協議会報告

資料 11.2、11.3 を用いて、平成24年7月5日に開催された CPD 協議会総会において紹介された ECE プログラム委員会の平成23年度事業報告及び平成24年度事業計画が川島幹事長から説明された。この際、（公）計測自動制御学会から「SICE 続プロセス塾」が ECE プログラムとして認められないかとの提案があったことが説明された。

3) SICE 続プロセス塾 2012 ((公) 計測自動制御学会) の ECE プログラム化

川島幹事長から、上記 2) を受け、平成 24 年 7 月 19 日 13:30-15:30 に、計測自動制御学会の奥津良之教育・認定委員会担当理事代行と川島幹事長が下打ち合わせを行ったこと、これに基づき SICE 続プロセス塾 2012 が ECE プログラムとしての資格を備えていると判断されたことから、ECE 幹事会で本件を審議することになった旨の経緯が報告された後、奥津氏から SICE 続プロセス塾 2012 に関する説明が行われた。概要は以下の通りである。

(1) 現場に精通したプロセス制御関連技術者を育成することを目的としたプログラムである。(2) 約 10 ヶ月をかけた通信教育であり、5 回のスクーリングを実施する。スクーリングは 1 日が 2 回、1 泊 2 日が 3 回である。

(3) 講師陣はこの分野のドンの存在である大学名誉教授を塾長に、大学教員、経験豊富や高度技術者 13 名他から構成されている。1000 ページを超えるテキストが用意されており、基礎から応用までの幅広い内容を学習できるようになっている。参加者には課題を出し回答を提出させて、理解度を確認している。

(4) スクーリングでは、講師と参加者間のインタラクティブな講義と討論を行っている。また、宿泊付き研修では、実習を含めている。

(5) 講師を交えて現場見学を 2 回実施している。

(6) 修了者には、SICE 「計測制御エンジニア補」 資格認定試験の試験免除合格者の特典を与えている。

(7) 募集は毎回 35 名程度で、13 万円/人の参加費用を徴収している。

(8) 本プログラムを平成 18~20 年度の 3 年に実施した所、大変好評であったことから、途中 1 年あけ、第 2 期として平成 22~24 年度の 3 年に実施中である。本年度は第 2 期の 3 か年目に相当する。現在までに 200 人近い受講生が受講している。

(9) 平成 24 年度プログラムは、平成 24 年 6 月~平成 25 年 3 月の予定で実施中である。スクーリングは、平成 24 年 6 月 1 日、9 月 3~4 日、10 月 5 日、12 月 7~8 日、平成 25 年 3 月 8~9 日の 5 回、実施予定である。

以上のプログラム説明に対して、出された意見は以下の通りである。

(1) 本プログラムは、コース制となっており、他分野を包含すると同時に、講師陣との討議を通して理解を深める仕組みを有している。さらに、座学だけでなく見学を含んでいる。こうした点から見て、本プログラムは ECE プログラムとみなすことが可能である。

(2) 資料 4 によれば、ECE プログラムの要件として「複数の学協会が連携することが有効なプログラムである」ことが求められている。しかしながら、あるプログラムの主催を複数の学会に分けることは会計責任をどの学会が取るか等、現実には技術的に困難である。このため、ある学会が主催しこれに複数の学会が共催として参加するとか、一つの学会が主催しても、適切な講師を参加させ、内容が複数の学会にまたがっているプログラムは ECE プログラムとして認定可能であるというように上記の要件を緩和し、これが明確にわかる表現に変えるべきではないか? この条項があるために、学会が ECE プログラムを実施しようとする際の障害になっている可能性がある。

(3) 平成 24 年度はすでにプログラムがスタートしているため、本プログラムを ECE プログラムとして認定するとすれば平成 25 年度からとすることが順当かもしれない。しかし、今からでもさかのぼって平成 24 年度の ECE プログラムとして認定してはどうか。これが困難な場合であっても、平成 24 年度には ECE のパイロットプログラムという位置づけは可能だと考えられる。

(4) ECE プログラムとしての申請に関する計測自動制御学会側の理事会審議結果を待ち、本プログラムの ECE プログラムとしての取り扱いを奥津氏と協議して進めることとする。

4) 今後の ECE プログラムの開発

資料 11.7.1～資料 11.7.6 に基づき、それぞれ、秦、小松、但田、高草木、長井、川島、盛山の各氏から意見が説明された。時間の関係で、質疑の時間がとれなかったため、議論は次回に回すこととしたが、出された主要な意見は以下の通りである。

(1) Need Oriented な分野から見た異分野との協働が重要である。また、学会が多すぎて、技術者が分散されすぎている。たこつばに閉じこもらないことが重要である。学会の横断が求められる。

(2) 日本工学会のセミナーに対して ECE プログラムの場と場所を提供すべきである。たとえば、「日本の再生可能エネルギー技術を探る技術力」といった内容がおもしろいのではないか。

(3) グローバル市場で求められる価値を提案しろと言われても、そんな課題は考えたこともない技術者が多い。

(4) 企業は勤務時間内の教育を悪と考えている。技術士を取らせると、会社を辞めていく場合が多いため、技術士を取らせようとしなないこともある。名刺にも技術士であることを書かせない場合がある。

6. その他

1) 幹事の拡充

秦氏に ECE プログラム委員会幹事を依頼した。

2) 次回幹事会

第 12 回 ECE プログラム幹事会では、今後の ECE プログラムの開発に関する議論を中心とし、メールによる日程調整の上、平成 24 年 8 月 20 日 (月) 16:00-18:00 もしくは平成 24 年 8 月 21 日 (火) 10:00-12:00 のいずれかに工学会会議室にて開催する。